『ONE BOOK ONE LIFE』別冊号1986年9月10日第１号発行

ろくおん通信

発行日　１９９７年９月１５日

No. ９５

発行　盲人情報文化センター 録音製作係

処理を考える（２３）

「コンピュータ読み」

ある時、まるでコンピュータが読んでいるような読み方に出会った。もちろん録音図書ではない。読み合わせ校正をしている時だ。最初から最後まで平板で、語尾も全く落ちずに読んでいく、「校正よみ」というのだろうが、まさに「コンピュータ」が読んでいるようだった。側にいるのでつい聞こえてくるのだが、これが以外とイライラしてしまう。もし、実際にコンピュータが読んでいるのであれば、イライラどころか、逆に「結構、うまく読んでいるな」と思うのである。人の声だとどうしてイライラするのかとふと不思議に思ったので、合成音声を聞き慣れている視覚障害者にこのことを尋ねてみた。やはり答は同じだった。コンピュータの読みには慣れても、人間の「コンピュータ読み？」はどうも慣れないらしい。コンピュータの場合は最初から自覚して聞いているが、人の声だと今までたくさん聞いてきた読み方のレベルがある。ある程度の水準の読み方でないと聞く方がイライラするのは仕方のないことだろう。

しかし、仮にコンピュータ読みであっても、スピードを２、３０％早くして聞くと、これまたあまりイライラせずに聞くことができる。これは早くなることで「人の声」としてより「機械的な声」に近づく為なのだろう。最近では倍速で聞ける録音機も普及しているが、倍速で聞くとなるとほとんど目で読む速度に近くなるので内容を追うだけで精一杯となる。４倍速で聞く視覚障害者がいると聞いたが人間の耳はすごいものだ。

通常のスピードで聞くと、その人の読み方のうまい、へたがはっきりしてしまうのは聞く方の耳が肥えているからか。コンピュータの合成音声もそのうち人間の声にさらに近くなってくると今までのようなコンピュータの読みはイライラすることになるのかもしれない。

音声訳者の手による録音図書が聞き手をもしイライラさせるとしたら大変だ。処理が適切でないために文章の意味が分からない時もイライラすることになるだろうが、ほとんど初見で読んでいるのではと思われるものに出くわすと、これもイライラすることになるだろう。校正者からときどき「初見で読んでいるような読みがある」と指摘されることがあるが、聞き手の耳はよく肥えていることを肝に銘じておくべきだろう。

今月の練習問題

＊ルビが二つあるのは原文では左右に付いています。
＊＊漢字・ルビの処理

聖林寺

三輪山と深くつながる寺院

聖林寺は桜井市の南部、多武峰街道の西側の高地に位置する。現在は真言宗の単立寺院である。

その創立については確かなことは不明だが、寺伝によれば和銅五年（七一二）に藤原鎌足の長子定慧が父の菩提を弔うために精舎を建立したのが始まりという。平安時代には談山（多武峰）妙楽寺の別院であったが、鎌倉初期に大神神社の神宮寺である平等寺の慶円上人によって再興され、江戸時代になると性亮玄心が三輪山の遍照院を移し、寺号を霊園山遍照院と称した。性亮玄心は遍照院の院主で元禄期の人である。聖林寺と称するようになったのは、江戸時代中期の文春諦玄が巨石を用いて丈六の巨大な地蔵菩薩座像をつくり本尊とした頃とみられる。

聖林寺には三輪山の大神神社の神宮寺である大御輪寺（大神寺）に関連する文書が多数残っており、また大御輪寺の最後の住職は聖林寺の出身であることなどから、これらの神宮寺と聖林寺はふるくから緊密な関係にあったことがわかる。現存する乾漆造りの十一面観音立像（国宝）はもと大御輪寺のものであるが、こうした両寺の関係からすればこの像が聖林寺へ移坐されたこともうなずけよう。

なお、聖林寺には本尊の地蔵菩薩坐像や乾漆造りの十一面観音立像のほかにも、平安時代後期の金銅素文の磬や聖観音立像、地蔵菩薩立像、毘沙門天像など、多くの寺宝が伝来している。

十一面観音立像

森厳な天平の密教本尊像

この像は典型的な十一面観音の立像であり、もともと大神神社の神宮寺・大御輪寺に祀られていたが、明治初めの神仏分離の際、聖林寺に移され、現在は本堂後方の収蔵庫に安置されている。

体軀は胸を盛り上げ、胴を締めてはずむような肉づけをあらわし、また肩・肘を外側に張り、堂々とした威風を示して直立する姿勢は、見事な量感をたたえ、しかも各部にすきのない均衡美を作りだしている。

かつて、この像の彫刻作品としての価値を過小評価する見方もあった。つまり薬師寺金銅の薬師三尊像（国宝、５号４-138ﾍﾟｰｼﾞ参照）や東大寺法華堂の不空羂索観音立像（国宝）のように写実的な人体表現の完成をめざした天平彫刻の秀作と比べたとき、聖林寺像は見劣りがするというのである。たしかにこの像は、筋肉や衣文の微妙な表現に乏しい点は否めず、形式化の進んだ表現も見受けられる。しか

し本来、仏像が礼儀のためのものであることからすれば、堂々とした体軀は、むしろ礼拝の対象として最も似つかわしい。また森厳で神秘的な暗さをたたえた表情は、当時の密教の本尊像として十分な威厳に満ちており、天平後半期を代表する仏像として国宝にふさわしいものといえよう。

像は、天平後期から平安初期にかけてさかんに造られた木心乾漆造りの技法による。まず木でだいたいの形を造りこれを木心とし、その上に厚く乾漆を塗り固めるもので、木屎漆を盛り上げたり、麻布を重ねたりして整形する。木心は頭体の幹部を檜の一材から造り、背面の上部と腹部から内刳りをして蓋板をあて、これに別材の両腕をつけ、指先は天衣の遊離した部分には鉄心を木心に差し込む。この本体に一メートル以上の長大な両足の柄材を足の裏から腿のあたりまで差し込んで台座上に立てている。なお、ほぼ同時期の同じく木心乾漆造りによる十一面観音像で作風のよく似た作品に、京都・観音寺の十一面観音立像（国宝、像高一七二・七センチ）がある。

大御輪寺から移る

この聖林寺十一面観音像は本来、大御輪寺の本尊であり、明治の初めに聖林寺に移されたものという。大御輪寺の創立は不明であるが、奈良時代の文献によれば「大神寺」という寺院が存在している。大神寺はその名称から、大神神社の神宮寺で大御輪寺の旧称と考えられるから、大御輪寺の創立は奈良時代にさかのぼることになろう。『延暦僧録』の釈浄三伝によれば、大神寺において浄三が六門蛇羅尼経を講じたとある。浄三は天武天皇の第四子長親王の子、智努王の僧名であり、この智努王は木工頭や造宮使、造離宮司、さらに東大寺大鎮、法華寺大鎮、唐招提寺別当など建築・工匠関係の重職を歴任した人物である。この十一面観音立像が乾漆造りということや大神寺に智努王が関係していたことからすると、この像は造東大寺司系の官営工房の制作によると考えられる。智努王は宝亀元年（七七０）十月に薨じているから、その制作年代はこれ以前にまでさかのぼることになろう。

大物主神のいます山・三輪山

大神神社の歴史

三輪山は、奈良盆地の東辺につらなる山々の南寄りに位置しており、古くは三諸山（御諸山）とも呼ばれていた。標高四六七・一メートルの小山ながらも、笠を伏せたような、なだらかな山肌全体に古松老杉が生い茂る、秀麗優美な山である。この三輪山は、古来より全山御霊という神体山として進行され、西側の麓には山そのものを御神体として祀る大神神社が鎮座している。「三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや」（額田王）と『万葉集』にも謳われているように、三輪山は古くから大和びとの心の山、聖なる山だったのである。

大神神社は三輪神社・三輪明神とも称され、平安時代には大和国の一宮（中世、国内で第一の位を占めた神社）となり、明治以後は官幣大社（明治政府によって定められた神社の格。他に中・小社もある）であった。『延喜式』には「大神大物主神社」と記されているように、大物主神を主神として、大己貴神・少彦名神を合祀する。す

なわち、三輪山にいます神は大物主神ということになる。

古代からの信仰の対象

『古事記』神代巻によると大物主神は大国主神の国造りを助けに現れ、後に三輪山に鎮まったという。さらに『日本書紀』崇神巻では、国内に疾病が蔓延した際、大物主神の教えによってその子大田田根子を祭主として大物主神を祀らせたところ、疾病・災害がおさまり、国中は平穏にもどったという。大神神社の起源はこの所伝にもとづくのである。

一方、大田田根子命は、大物主神（大神）の神孫とする系譜から、三輪山付近を本拠地とした三輪（神・大三輪・大神）氏という古代豪族の祖とされた。そのため大神神社は三輪氏の氏社となり、古代より三輪氏によって永く神主職がつとめられてきたのである。

大神神社は三輪山を神体山として遙拝（遠いところから拝むこと）するため、古来から独持な社殿形式をとっている。すなわち、神体を安置する本殿がなく、拝殿の背後に楼門と鳥居が建てられ、参拝者はそこから直接に三輪山を拝するのである。鳥居も通常の大鳥居の左右に小鳥居を配するという他には例をみない形式で、三輪鳥居と呼ばれている。

また、大神神社の境内周辺は神社成立以前より古代祭祀が行われた地域で、拝殿背後の三ツ鳥居から少し進んだ所には辺津磐座があり、禁足地となっている。磐座とは神の鎮座する座のことであるが、こうした磐座は三輪山中に奥津磐座、中津磐座と合わせて三か所ある。さらに山中には四、五世紀ごろの祭祀遺跡が散在し、なかでも大正七年（一九一八）発見の山ノ神遺跡は有名で、数多くの祭祀遺物が出土している。

独持の神仏習合で繁栄

さて、大神神社の神宮寺には、いわゆる三所寺とよばれる大御輪寺・平等寺・浄願寺などがあるが、このうち最も古いのは大御輪寺であろう。大御輪寺の寺名は鎌倉時代以後のものだが、それ以前には大神寺と称されていたようである。大神寺の創立は不明であるが、奈良時代には存在していたようで、天平後期彫刻の秀作として知られる聖林寺の十一面観音像も同時期に大神寺に安置されていたと想像される。

中世には神宮寺として平等寺が勢力を伸ばし、大御輪寺は大神神社の別当寺として存続した。この二つの真言宗寺院が大神神社の実権を掌握し、両寺の僧侶のあいだで真言系の両部神道（金剛、胎蔵両部の教理を用いた神道）の三輪流神道が唱えられ、独持な神仏習合の形態をとった。しかし、両寺とも明治初年の神仏分離によって廃絶した。今ではかつての大神神社の神宮寺であった玄賓庵だけが残っている。

大神神社に所蔵される近世の「三輪山絵図」には、神体山である三輪山と社殿の景観が自然景とともに描かれている。この絵図は神仏分離以前の三輪山の信仰を知るうえでたいへん貴重なものだが、画面上部に神体山である三輪山が三山形式で、その下部には拝殿周辺や神宮寺の伽藍のようすが詳細に描写されている。画面中央には三輪山を遙拝する大神神社の拝殿があり、その後方には三輪鳥居が配されている。この拝

殿の向かって右上方に平等寺、さらに左下方には大御輪寺である若宮が描かれている。

三輪山にゆかりの仏像

聖林寺十一面観音像は三輪山の大神寺（大御輪寺）に安置されていたと思われるが、奈良時代後期には古密教の影響により、山岳の寺院が建立され、山林に修行・儀礼を行う行者が数多く存在した。山岳の十一面観音信仰は奈良時代後期以後に流行し、他にも東大寺二月堂、長谷寺本尊などの像が造立されている。長谷寺のある初瀬山の三輪山と同じく、古代から霊山として信仰されてきた。聖林寺十一面観音像も三輪山という聖なる山に神秘的な効力を求めて製作されたものであろう。

ところで、大御輪寺の仏像は聖林寺以外にも、法隆寺の地蔵菩薩立像（平安初期、国宝）、橘寺の日羅立像（平安初期、重要文化財＝以下、重文と略）、奈良・融念寺の伝地蔵菩薩立像（平安初期、重文）として現存する。これらの造は三輪大明神の僧形神像であったと推定されている。また、玄賓庵の不動明王坐像（平安時代、重文）は、もとは大御輪寺の護摩堂に祀られていた像であり、奈良・正暦寺には大御輪寺の日光・月光菩薩立像や幡が伝わっている。　（川瀬由照）

二通りの読みがあって意味が異なるもの　（51）

太白	ﾌﾄｼﾞﾛ 白いかたびら ﾀｲﾊｸ 太白星の略　精米した純白の砂糖	前身	ﾏｴﾐ 前身頃の略 ｾﾞﾝｼﾝ 前世の身
一世	ｲｯｾｲ 一生涯 ﾋﾄﾖ ｲｯｾ 仏教で過去・現在・未来の三世の中の一つ。一生涯、終生	剽軽	ﾋｮｳｹｲ 素早く身軽なこと。浅はかで軽はずみなこと。 ﾋｮｳｷﾝ 気軽明朗であって滑稽なこと。おどけ。
初月	ﾊﾂﾂｷ 陰暦の正月 ﾊﾂﾂﾞｷ 陰暦で月の初めの夕方に見える月。特に陰暦八月初めの月。	中年	ﾁｭｳﾈﾝ 青年と老年との中間の年頃。壮年。 ﾁｭｳﾄﾞｼ 足掛けに対していう年数の数え方。

『言葉に関する問答集』文化庁編より

「初体験」「初対面」の「初」は「ハツ」か「ショ」か

（答）「初体験」・「初対面」などの「初」を、「ショ」というか、「はつ」というかという問題である。

初体験について

この語は、各種国語辞典、漢和辞典、新語・流行語辞典、各種の用字用語集や手引きなどの類、百種余りに当たってみたが、見出し語として採録しているものは、『学研国語大辞典』（昭和５３年初版）一種だけであった。これによれば、見出しは「はつたいけん」であり、その語釈は、「初めての体験。特に初めて異性と肉体関係を持つこと。」とあり、「しょたいけん」という語形は掲げていないし、見出し語としてもない。なお、この辞典には、「体験」の項に、この語が「下部を構成する語」として、「原－・初－」と掲げてあるが、読みは示していない。また、『現代国語例解辞典』（昭和６０年度初版）の「体験」の項に、用例の一つとして「初体験」とあるが、やはり、読みは示していない。更に、『朝日新聞の漢字用語辞典』（昭和６１年度初版）の「体験」の項に「原－・初－」とあるが、これにも読みは示していない。

次に、『新明解国語辞典　第三版』（昭和５６年度初版）の「体験」の項の用例は「初ハツ　　」とあり、また『常用漢字・送り仮名　用字用語辞典』（昭和５７年度初版）の「はつ（初）」の項の熟語の一つに「初体験」とあり、これらは、「はつたいけん」であることが分かる。

以上によって、「初体験」は、「しょたいけん」を全く否定することはできないが、どちらかといえば、「はつたいけん」のほうが優勢であろうと思われる。試みに大学生などの間では、どちらの形を使うかを質問してみたところ、どちらの形も使っているとか、「はつたいけん」は、広く一般に物事の初めての体験に使えるが、「しょたいけん」は、性的体験の場合に限って使うとかの意見もあった。ただし、これは、人数も少なく、正式な調査でもないので、判定はしがたい。

なお、昭和６１・１０・２４、ＮＨＫ総合テレビジョンで１９時３０分から放送された番組の中で、キャスターは、「工場のアメリカ進出は、我が国にとってショ体験のことである‥‥」と言っていた。

この語は『邦訳　日葡辞書』、『和英語林集成（初版・三版』、『言海』をはじめとして、以降今日に至るまでのほとんどの国語辞典・漢和辞典に採録されている。昭和３年刊の『改修言泉』では、「しょたいめん」の項には、「はつたいめん」の形を掲げていないが、別に、「はつたいめん」を参照見出しとして立ててある。その後のものでは、「しょたいめん」の項に「はつたいめん」の形を掲げるものはかなりの数にのぼるが、「はつたいめん」を見出しとして立てているものは少ない。国語辞典等について右のことをまとめると次のようである。

・「しょたいめん」を採録しているもの・・６４種
・右の語釈中に、「はつたいめん」の形を掲げているもの・・・・・１８種
・「はつたいめん」を採録しているもの・・・４種
　［ただし、うち１種は、「しょたいめん」の項に「はつたいめん」の形を掲げていない。］
・「しょたいめん」、「はつたいめん」共に採録していないもの・・・・５種

以上のとおりであって、「初対面」は、「はつたいめん」を誤りであるとして否定することはできないであろうが、現在では「しょたいめん」が安定した形として一般に使われているということが言えよう。

なお、「初対面」は普通には名詞として用いられるが、森鷗外の「文づかい」には、

今やわれ下界を離れたるこの塔の頂にて、きのふラアゲ耳ツツの丘の上より遥に　　初對面せしときより、怪しくもこゝろを引かれて、‥‥‥［岩波書店『鷗外全集第二巻』　（昭和46・12・22刊による。）］

のように、「初対面す」の形で用いられている。

なお、漢字二字で書き、音読みをする語に、「初（しょ）」・「初（はつ）」の接頭語を冠したものには、次のような語がある。

「初（しょ）」‥‥｛初発心（ほっ）　初転法論　初一念　初感染　初対面　初年度｝

「初（はつ）」‥‥｛初演奏　初会合　初冠雪　初協定　初喧嘩（けんか）　初公開　初参加　初出場　初節句　初対局　初挑戦　初通話　初天神　初登場　初入選　初舞台　初優勝　初輸出　初要請｝

右のように、「初（しょ）‥‥」という場合は比較的限られているのに、「初（はつ）‥‥」という場合は、これ以外にも多くの語がある。したがって、「体験」に冠する接頭語を「ハツ」と訓読することは不自然ではなく、違和感もないようである。

利用者から製作依頼を受けている原本

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。初めてのグループの方は何か５分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音状態をチェックさせていただいてから録音にかかっていただきます。

書　名　　＜分類＞
『殺人探究』フィリップ・カー著 ＜小説＞ 文庫 490頁
『地獄からのメッセージ』Ａ・J. クィネル著 ＜小説＞ 文庫 400頁
『ウサギの衣・食・住』大竹隆之他著 B5判　200頁
『カメの衣・食・住』徳永卓也著　Ｂ５判
『悪魔の予言』日下公人著　＜社会科学＞　四六判　235頁
『クリエイティング・マネー』サネヤ・ロウマン他著 ＜心理学＞四六判 387頁
『魔法のタワシ　洗剤なしだから環境にやさしい』＜手芸＞　55頁
『灯・７月・８月・９月』各１冊　原あつし著　＜詩歌＞　四六判　40頁
『レニン・アンジオテンシン系と心臓　１』＜医学＞　Ａ４判　27頁
『レニン・アンジオテンシン系と心臓　２』＜医学＞　Ａ４判　27頁
『取手方式で腎不全に克つ』椎貝達夫著　＜医学＞　四六判　242頁
『福祉国家はどこへゆくのか　日本・イギリス・スウェーデン』 ｱｰｻｰ・ｸﾞﾙｰﾄﾞ著＜社会科学＞　Ａ５判　266頁
『シバ謀略の神殿』ジャック・ヒギンズ著　＜小説＞　Ａ５判　250頁
『腎臓病の生活ガイド』平田清文著＜医学＞　Ｂ５判　215頁
『循環器病の診断と治療』大阪府立成人病センター編 ＜医学＞ Ａ４判 300頁
『わたしの怖い体験　本当にあった心霊現象』＜心霊研究＞　文庫本220頁
『ディスカバリー世界の実相への接近』＜宗教＞　B5判 308頁
『ヨセフとその兄弟　II』　＜宗教＞ B4判 620頁
『ヨセフとその兄弟　III』　＜宗教＞ B4判 562頁

今回引き受けて頂いた原本とグループ

『黄金の少女５』平井和正著　＜小説＞	盲人情報文化センター
『薬の手引き　病院でもらった薬がわかる』	えくてもあ
『永遠の法』	〃
『ダーティホワイトボーイズ』	ﾃｰﾌﾟﾗｲﾌﾞﾗﾘｰにしのみや
『全国短歌大会』	〃
『ネアンデルタール』	みなわ

お知らせ

★　ボランティアリーダー懇談会　★

公共図書館や点字図書館に所属するボランティアグループで録音図書の製作に携わっておられるグループリーダーの方を対象に、下記の日程でグループリーダー懇談会を計画しています。該当するグループは当該の館から依頼がありますのでご協力よろしく思います。
また、図書館には所属していなくても、録音図書を製作しているグループであればぜひ参加ください。

主　催：　近畿視情協録音製作委員会
日　時：　１９９７年１０月２３日（木）１時～３時
場　所：　盲人情報文化センター９Ｆ
内　容：　1.録音委員会の紹介
　　2.96年度録音製作アンケートの報告
　　3.交流・懇談　グループの紹介の要望
＊尚、問い合わせは盲人情報文化センター 清水まで

★ 専門音訳講習会（図表コース）のご案内 ★

専門音訳講習会の図表コースが９７年１１月２９日（土）より１０回の予定でスタートします。希望者は盲人情報文化センター　清水までご連絡下さい。

日　時：　11月29日（土）～　98年２月14日（土）
　　10時30分～12時30分（毎土曜日）
試験日：　11月８日（土）10時～12時

尚、点字図書館および公共図書館には、別途、近畿視情協事務局より聴講生の派遣依頼も行っています。点字図書館、公共図書館に所属されているグループの方は所属館へもお尋ね下さい。